

棕の道草 第20回 「虫めづる私」

瀬名杏香

少ししょっぱい思い出がある。

上京して一年目の夏、隅田川沿いの公園を歩いていた日のことである。浅草は父方の実家がある。浅草は東京のどこよりも親しいのに父という存在の気恥ずかしさの象徴のような、不思議な町であった。吾妻橋から墨田区側に渡り、上流を目指して歩いていくと、富田木歩終焉の地がある。私がひそかに憧れていたその先輩は、歩きながら木歩の生涯について話してくれた。

汗をかきつつ辿り着いたその場所は、生垣の陰に細長い碑がひっそりと立っているだけの景色だった。なんかさみしいですね、と言い合いながら私たちは手を合わせた。死者と通じ合う方法がそれしか分からなかったのである。

先輩はふいに「これは蟬の穴だね」と土があらわになった地面を指差して言った。そしてそばの低い生垣には数えきれないほどの空蟬がしがみついていた。十八まで暮らした北海道には蟬がほとんど生息していない。空蟬は私にとって未知の季語だった。物珍しくてそれを生垣からはがしてみる。ひとつ、ふたつ、みっつ。そのうち、自分のハンカチを取り出してその中に集めていく。団栗を拾うような感覚だ。その姿に先輩の顔が引きつったのはいうまでもない。

その後も俳句や季語への興味は増すばかりであった。二〇一九年十一月、雀先生の暮らす名栗を初めて訪れた。暦通りに初冬の空気を感じさせる、吟行日和の一日であった。紅葉も皂角子も啄木鳥も笹鳴も、見るものすべてが私の心をときめかせた。

紅葉が一望できる丘には冬桜が咲いていた。可憐な白い花びらをぽつぽつと咲かせたその木に、皆が集まって今日を喜んだ。すると、冬桜の枝に、ぶら下がっているのか引っかかっているのか、枯葉の塊のようなものをいくつも見つけた。蓑虫である。

都市から蓑虫が消えているというのは本当なのだろうか。やはり蓑虫も私にとって未知の季語だった。見たことがないので本物の蓑虫かどうか不安である。近くの人を呼び止めては「これは本物の蓑虫でしょうか」と問いたです。冬桜をめでの一行の中で、私だけがあたふたと蓑虫に気を取られていた。

蓑虫の蓑あまりにもありあはせ 飯島晴子 (『儂々』一九九六、角川書店)



春も夏も秋もここに来て全部の季節を見たい。今もそう意気込んでいる。虫めづる私の知らない季語に、これからも出会えることを祈って。